

令和元年度 自己評価表

鳥取県立白兔養護学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>人と関わりながら自立と社会参加に向けて努力する子どもの育成</p>	<p><b>白兔のあいうえお</b>  <b>あ</b> いさつを交わし みんななかよく  <b>い</b> のちはひとつ 自分も友達も大切に  <b>う</b> んどうをして 健康で元気な身体  <b>え</b> がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校  <b>お</b> もいやりのある 豊かな心</p>		<p>今年度の重点目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域や企業等と連携した教育活動の推進</li> <li>・「何を教える(学ぶ)のか」教育内容の整理</li> <li>・様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実</li> <li>・チームで取り組む教育相談・支援の充実</li> <li>・地域におけるセンター的機能の充実</li> </ul>
---------------------------	--------------------------------------	--	--	---

年 度 当 初					評価結果 ( 9 ) 月			
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 地域や企業等と連携した教育活動の推進	○社会とのつながりを意識した授業づくり ○発達段階、年齢に応じた社会資源を活用した取り組みの広がり ○福祉機関、病院等との連携	小学部	・地域生活につながる学習活動(基本的な生活習慣、余暇活動等)を充実させていく必要がある。	・基本的生活習慣の確立や人との関わりを広がりを目指した実践を重ねている。	・懇談や支援会議等で児童の発達の状況や将来像について共有し、学校、家庭、関係諸機関で一貫した指導を行う。	・家庭、関係機関と連携をとり、基本的生活習慣の確立(身近自立、挨拶、時間を守る等)をめざし、学校生活の中で着実に身に付けてきている。懇談等でも共通理解をしている。	B	・より児童の将来像を共有していくために、継続して家庭、関係機関との連携を図る。
		中学部	・地区老人クラブとの交流会や総合的な学習(探究)の時間を通して、地域の人、ものに関心を広げている。	・生徒が地域を知り、地域の方とのふれあいを有意義に感じる活動を計画推進している。	・地域とつながる学習の内容を検討し、計画的に地域とつながる学習を進めていく。	・総合的な学習の時間を活用して、地域探検に出かけ地域のことを知り、地域の方とふれ合う計画を立ててきた。直接の交流体験は、10月以降の予定であるが、交流に向けて内容を考え、発表の練習をしている。	C	・中学部の学習全体において、地域と関わる事が可能な内容を検討し、積極的に実践していく。(生活単元学習、社会科、国語)等
		高等部	・卒業後に働き続けられるよう、自己理解(自己有用感・障がい理解)の深まりが必要である。	・生徒と保護者、学校が、適切な自己理解のもと、卒業後の働く姿をイメージしながら進路について考えている。	・適切な実態把握のもと、実習先や地域を巻き込んだ学習を展開していくことで、より適切な自己理解が図れるようにする。	・地域の教育力を取り入れた学習活動を数多く計画している。機会をとらえて少しずつ実践し、生徒も役立ち感や満足感、自信を高めている。また、進路担当を中心に企業等との連携も進んできている。しかし、適切な自己理解や卒業後のイメージについては、コースや個々の実態により十分とは言えない状況がある。	B	・計画を元に取り組みを継続し、生徒の役立ち感や自己肯定感を高める。また、卒業後も意識しながら自己理解が深まるようにする。
		訪問学級	・病院関係者(看護師、医療、リハビリ、療育等)や保護者と連携を図りながら、安心・安全な環境作りに向け、実態把握に努めている。	・児童生徒一人一人が障がいやその程度、発達段階に応じて学習に見通しや期待を持ったり、病棟と学校生活への切り替えを意識したりして生活する。	・病棟からの申し受けやリハビリ懇談会等で得た情報を日々の学習に取り入れ、支援の改善や充実を図る。	・地域の教育力を取り入れた学習活動を数多く計画している。機会をとらえて少しずつ実践し、生徒も役立ち感や満足感、自信を高めている。また、進路担当を中心に企業等との連携も進んできている。しかし、適切な自己理解や卒業後のイメージについては、コースや個々の実態により十分とは言えない状況がある。	B	・病棟スタッフと引き続き連携を図り、申し受けの情報を教員同士共通理解していく。また、安全に学習できるように移乗、姿勢変換等教職員同士、教職員と看護師で確認し合う。 ・リハビリ懇談会で得た情報を他の学習でも生かしたり、理学療法士と連携し、より効果的な支援を行う。
		総務部	地域の方々とかかわりの充実が課題である。	・白兔まつりやクリーンクリーン活動等を通して、地域の方々とのふれあいを深めている。	行事の案内や様子をホームページに掲載する。行事後にアンケートを実施し、問題点を改善していく。	・クリーンクリーン活動や白兔まつりを通して、地域の方々とのふれあえるように、準備を進めている。	B	・行事後のアンケートをもとに、問題点を検討し、改善していく。
2 「何を教える(学ぶ)のか」教育内容の整理	○学習集団の育成 ○主体的に学ぶ態度の育成 ○学ぶ環境の工夫 ○内容の整理	小学部	・障がいの重度重複化、多様化に伴い、児童の実態に合った教育課程、教育内容を検討していく必要がある。	・的確な実態把握を行い、教育課程や教育内容について検討し、改善が図られている。	・本年度の研究(教育内容等の整理)の推進とともに、学部の教育課程検討委員会において検討する。	・各学級で実態把握を元に個に応じた学習活動を進めている。教員間で実態把握、理解に差があり、実態把握の仕方について学部全体で検討し、共通理解する必要がある。	C	・研究で取り組んでいる内容(年間指導計画の整理)も踏まえて教育課程の検討をすすめていく。 ・課題学習、自立活動について、実態把握、学習内容の設定について共通理解する機会を持つ。
		中学部	・昨年度の研究の成果と課題を踏まえ授業改善に取り組んでいる。本年度は、地域とつながる学習及び新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育計画立案をしていきたい。	・新しい教育の流れを踏まえ、生徒実態に即した教育内容の整理を行い、学ぶ意欲の向上を目指した授業づくりに取り組んでいる。	・昨年度の研究を活かして学ぶ意欲を高める授業づくりに努める。	・授業の計画を立てる際や実践途中の過程で、生徒の実態に即した授業について話し合いを持っているが、時間的、内容的にも十分な協議にはなっていない。昨年度の研究内容の主体的、対話的で深い学びを目指した授業づくり等について、再度確認し合う必要がある。	C	・昨年度の実践を発展させながら、授業の質を高めていく。授業計画の段階での話し合いの時間を確保し、昨年度の研究内容を含めた協議ができるようにする。
		高等部	・卒業後の自立した生活に必要な基本的生活習慣が定着していない。	・生徒と保護者、学校が、自立に向けて必要な力を共通理解し、その定着に努めている。	・生徒、保護者一人一人の存在が認められる安心感を基盤としながら、普段の肯定的な関わり、連絡帳や電話等における関係づくりを進めていく中で、生徒、保護者との信頼関係を構築する。	・生徒、保護者一人一人の存在が認められる安心感を基盤としながら、普段の肯定的な関わり、連絡帳や電話等における関係づくりを進めていく中で、生徒、保護者との信頼関係を構築する。	B	・取り組みを継続して生徒・保護者とのより深い信頼関係を構築していくと同時に、関係機関等を巻き込んだ教育相談を意識していくことで、より自立に向けた力が定着できるようにする。
		訪問学級	・ICT教育機器(視線入力装置、iPad、個に合ったアプリ等)を日々の学習の中で活用しはじめていく。	・ICT教育機器を使って主体的に学習に取り組んでいる。	・実態に応じた適切な環境を学部内で協力しながら整備し、アイデアを出し合い、日々改善に努める。	・情報教育部員を中心にICT機器(視線入力装置、音声出力スイッチ、iPad、OriHime)を学習に取り入れて学習する機会が増えた。	C	・ICT教育機器、実態に応じた教材を情報共有していく。
		教務部	・個別的教育支援計画や個別の指導計画の様式が新学習指導要領や白兔の付けたい力に対応していない。	・個別的教育支援計画や個別の指導計画の様式を、研究で行われる年間指導計画の整理と同じ方向性で見直すことができている。	・個別的教育支援計画や個別の指導計画の様式、それを作成するための保護者アンケートや記入例の見直しを行う。	・指導要録の様式が来年度より小学部から順に変更になることも踏まえて個別的教育支援計画や個別の指導計画の様式の見直しを行っている。様式を変更することによる問題点やそれを解決するための具体的方策等を、各学部教務や教務部で検討中である。	C	・実際に新様式を使って目標設定を行いながら比較をしたり、各学部で先生方の意見を聞いたりしながらよりよい方法について検討を進める。
研究部	・各教科・領域における具体的な指導内容の設定及び配列、「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」との関連、単元間のつながり等についての検討・整理が必要である。 ・学習評価の在り方について検討し、「評価」-「改善」につなげる仕組みを整備する必要がある。	・新学習指導要領および、白兔の付けたい力に合わせた教育内容や指導計画の整理が行われている。 ・児童生徒の学習状況の把握に活用できる仕組みの整理が行われている。	・全職員体制でグループ研究・学部研究を行い、教育内容等の整理を行う。 ・県内・県外校の視察や情報交換等を行う等、情報を収集を図り、学習状況を把握できる仕組みの整理を行う。 ・研究部だけでなく、教務部、キャリア教育部等他の分掌や研究推進委員会等連携を図り、協議や整備を行う。	・全職員でグループ研究を行い、新学習指導要領に対応し、白兔の付けたい力を組み込んだ教育内容や指導計画の整理が進められている。県内外等からも情報収集を行い、研究を充実化させている。 ・児童生徒の学習状況の把握に活用できる仕組みの整理は、指導計画や指導の在り方の整理後、整理した年間指導計画等をもとにしながら秋以降に取り組む方針としている。	C D	・11月末の全体研究会にて整理を進めている教育内容・指導計画の確認・共有化を行い、年度内に整理を行う。県外大学の専門家に指導や助言を聞く機会を設け参考にする。 ・整理した年間指導計画等の目標・内容や白兔の付けたい力の要素について分析する。研究部だけでなく、教務部、キャリア教育部、研究推進委員会等と連携を図り進めていく。		

○教材の工夫	キャリア教育部	・「児童生徒に付けたい力」が本校の障がいや重複化に対応した計画や学習内容になっているか検討することが課題である。卒業後の生活を見据えた、一貫性のあるキャリア発達を大切に教育を推進する必要がある。	・「付けたい力」が本校の実態に対応していることが分かり、実態に応じた目標を意識して指導している。 ・各学年の産業現場等における実習の意義を理解し、生徒や保護者に説明することができる。	・現場実習ふりかえりの会での学校に対する意見を集約する。障がい福祉サービス事業所、卒業生・保護者への聞き取りを行う。 ・産業現場等における実習について中学部から高等部6年間の移行が分かるように整理する。進路に関わる学習の見直しをする。	・5月の産業現場等における実習で14事業所（B型事業所、生活介護事業所）、12名の卒業生（B型事業所）への聞き取りを行った。卒業生保護者に卒業後の様子について聞き取りを行い、日曜参観日で発表していただいた。「白兔の付けたい力」との関わりを検討している。 ・産業現場等における実習の結団式、報告会のねらい、学習内容、学習形態等を見直した。8月に中学部、高等部担当が各学部の実習、進路に関わる学習の現状と課題等について協議した。	C	・今後の産業現場等における実習（9月、11月、2月）でも同様の調査を行い、データを集約する。産業現場等における実習ふりかえりの会での学校に対する意見も集約し、「白兔の付けたい力」が本校の実態に対応しているか検討する。 ・中学部、高等部の重複の校内作業実習について見直しができるよう、生活介護事業所の内容を洗い出し、作業内容を選択できるようにする。産業現場等における実習について中学部から高等部6年間の移行が分かるように整理する。	
	情報教育部	・情報機器の操作、活用マニュアル等の整備が十分でなく、アプリ等の活用も不十分である ・情報モラルの教職員の意識にばらつきがある。 ・図書館資料の積極的な活用が不十分である。	・情報機器の活用や、アプリの活用方法について理解している教職員が増えている ・基本的な情報モラルについての知識を習得している。 ・図書館資料を活用した授業がどの学部でも行われている。	情報機器のマニュアルを整備、ICTサポート事業との連携等で研修の機会を設ける。 情報モラルに対する研修会を実施する。 バリアフリー資料や図書館資料を活用した授業実践例の紹介を行う。	・機器の使用に困った際にはその事項をまとめ、部員で共有しすぐに対応できるようにした。  ・夏季休業中に個人情報保護、危機管理について研修を行った。  ・DVD絵本やマルチメディアデジパネルシアター等のバリアフリー資料を活用して、各学部で授業の提案を行っている。雑誌「学校図書館」や「としょかん通信」に本校の実践を紹介した。	B	・職員のニーズを集めるように努める。 ・新しい活用法等の情報を提供していく。  ・引き続き図書館資料を活用した授業の提案をしていくとともに、図書館環境の整備を進め、マルチメディアデジ図書をより授業等に取り入れやすくしていく。	
3 様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実	○防災、災害に対する対応策の整備	健康安全部	・災害時における対応の整備が進んできた。避難訓練、児童生徒の引き渡し訓練の実施方法を再検討していくことでより一層の安全教育に努めていく。	・様々な災害から自分を守る方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図りながら教職員の意識が向上している。	・避難訓練、児童生徒引き渡し訓練の内容を再検討しより充実した訓練にする。 ・学校安全計画に従って着実な仕事を行う。	B	・児童生徒引き渡し訓練の体制や保護者への引き渡し方法、関係機関との連携を充実させる。また必要な物品を購入し今後の訓練や非常時に備えることでより一層の安全教育に努めていく。 ・訓練等を通じて安全な行動の仕方、危険な場所や状況の予測、回避方法、必要な援助の求め方、防災グッズの使い方等を日常の学習に取り入れていく。	
	○児童生徒の防災意識を高める活動の推進	学部	・食物アレルギーや障がいや疾病に配慮の必要な児童生徒について健康、安全面に関わる危機管理についての教員一人一人の意識の高揚と体制を整備する必要がある。	・児童生徒の疾患や行動の把握、アレルギーや感染症の対応について共通理解し、学部全体で危機管理の意識が高まっている。	・学部会等で日々のヒヤリハットに関する情報を共有し、要因を検証し適切に対応する。	C	・今後も学部、学年、学級で丁寧に情報共有しながら、危機管理について見直していく。原因を分析し、指導の仕方やきまり、ルール等を見直して未然防止に努めていきたい。	
4 チームで取り組む教育相談・支援の充実	○スムーズな情報共有と関連機関との連携	小学部	・児童の気になる行動に対して、児童を取り巻く状況や家庭や関係諸機関と連携しながら解決していく必要がある。	・関係者間でスムーズな情報共有を行い、気になる事例や問題に対して早期に対応している。	・学部全体で児童について情報を共有するとともに、関係者同士（担任、学年、支援部、SSW、管理職、外部の関係機関等）とつながりを持ち、様々な視点を持って問題解決に努める。	C	・担当者間で情報把握の齟齬がないよう、情報の整理、記録の仕方を共有する。支援会議等、見直しを持って継続して設定する。 ・欠席児童への対応について、支援部、生徒指導担当等と具体的な対応策を検討していく。	
		中学部	・様々な教育課題や相談に対して、関係職員や関係機関につながる教育相談の充実が努めてきているが、保護者アンケートの結果からは十分に保護者のニーズに沿っているとは言えない結果となっている。	・チーム学部・学年の意識を持ち、支援の検討、生徒指導や保護者対応、教育相談等に当たり、生徒や保護者の信頼を得ている。	・生徒の課題状況に応じたケース会議や相談に努める。 ・情報共有を大切にされた職員の一貫した生徒指導、進路指導を進めていく。 ・保護者のニーズを踏まえて、支援部や関係機関とつながる相談支援活動を積極的に進めていく。	C	・一人で抱え込まない意識を持つために、全職員で生徒や保護者の情報を共有し、学年団、学部で関係機関や関係者とながら生徒指導や教育相談を継続して行っていく。	
		高等部	・学部・学年でより一貫した指導・支援をしていくためのシステム構築されていない。	・報告・連絡・相談のシステムが明確化され、学年・学部としての指導・支援が行われている。	・職員朝会、学部会、学年会等で、生徒の実態や現状を報告、連絡、相談し合うシステムを構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたるようにする。	・生徒の様子について情報を共有しチームで支援しようとする雰囲気ができつつある。何を報告・連絡するのが不明確なため、全体として共通理解する内容が統一できていない。	B	・共通理解する内容について再確認し、取り組みを継続する。
		支援部	・教育相談体制を整えることで、ケース会議等、チームで取り組む機会が増えてきているが、その取り組みを共有して次に生かす・全体に広げるに至っていない。	・生活や学習の中での教師の気づきや児童生徒の困り感をもとに、適宜ケース会議を開いたり、外部専門家や関係機関につないだりすることで、児童生徒への支援がより充実している。	・早期発見、早期支援・対応に向けた体制づくりと活用に取り組む。（ケース会議、生徒指導との連携、関係機関との連携） ・事例を紹介し合うことで、活用を生かす。	・生徒指導と連携して支援体制づくりを進めた。児童生徒の情報を共有することで、早期支援（ケース会議・関係機関との連携）に活かすように努めたが、別の業務と日程が重なる等により必要な時にケース会議ができないこともある。 ・早期支援のための情報共有の仕方について、システムの改善（職員気づきを活かす）を図っている途中である。	C	・支援体制・情報共有等、改善点を発信し、活用につなげる。 ・今後の活用につながるよう、システムや活用例を共有する。
		総務部	・生活の手引き、生活のアンケート等の活用、家庭や関係機関等との連携の充実が必要である。	・支援部や関係機関、家庭と連携し、児童生徒の支援を進めている。	児童生徒情報を学部や支援部等に伝え共有していく。チェックシート、生活の手引きの内容を検討する。	・不登校・いじめ等気になる児童生徒早期発見のための「チェックシート」、「夏休みのくらし」を検討し、内容を改善した。各学部や支援部と連携し、情報共有や早期対応に努めている。	B	「生活の手引き」の内容を検討し活用を進める。
5 地域におけるセンター的機能の充実	○ニーズに応じた専門性の発揮	支援部	・センター的機能として、担当の職員を中心に取り組んできているが、学校全体としてどう取り組んでいくのかを、整理してさらなる充実を図る必要がある。	・センター的機能の充実に向けて、教育相談や情報発信に生かせるように全教職員ひとりひとりの専門性を高まっている。	・専門性を高めるための研修及び15分研修の充実を図る。（専門性振り返りシートの活用、研修内容の工夫）	C	・研修した内容を職員で情報共有し、今後取り組みたいことを実践していけるように働きかけていく。 ・15分研修の研修一覧を全職員に周知し、参加を促す。	
		全学部・分掌	・それぞれの学部や分掌ではニーズに応じてセンター的機能にかかわることができる素地はあるが、学校体制としては整備が不十分である。	・学校にある相談等について、必要に応じそれぞれの学部や分掌の強みを生かした支援や助言をしている。	・学部、分掌でセンター的機能にかかわることができる内容を整理する。	C	・さらにセンター的機能が発揮できるように、学部や分掌と協力して教育相談にあたるようにしていく。 ・児童生徒支援に対する校内体制をさらに構築していくことで、外部からのニーズに合ったセンター的機能が発揮できるようにしていく。	
6 業務改善の取組	○会議、研修等の見直し ○業務の目的の再確認	全体	・一昨年度と比較し時間外労働時間を縮減することはできたが、職員によっては時間外労働が常態化しており改善が必要である。	・会議、研修等必要に応じて効率的に運営されている。 ・教職員が時間にゆとりをもった業務が行われている。 ・時間外勤務時間が削減されてい	・会議等の優先順位を洗い出す。 ・行事の準備等に過剰なものがないかの点検する。 ・業務過剰になっていないか管理職員が配慮する。	C	・協議内容を簡潔にまとめたり、説明事項もわかりやすく提示する等、相手に伝わりやすくする工夫を考えていく。 ・行事等について、目的等について協議し、本当に必要なことを考えていく。 ・声掛けを続けていく。	

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%程度) C:変化の兆し(60%程度) D:まだ不十分(40%程度) E:目標・方策の見直し(30%以下)